

令和元年度 自己評価表

鳥取県立白兔養護学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>人と関わりながら自立と社会参加に向けて 努力する子どもの育成</p>	<p>白兔のあいうえお あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心</p>		<p>今年度の重点目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域や企業等と連携した教育活動の推進 ・「何を教える(学ぶ)のか」教育内容の整理 ・様々な危険から安全を確保する防災・安全教育の充実 ・チームで取り組む教育相談・支援の充実 ・地域におけるセンター的機能の充実
---------------------------	---	--	--	---

年 度 当 初						評価結果 () 月		
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 地域 や企業等 と連携し た教育活 動の推進	○社会とのつ ながりを意識 した授業づく り ○発達段階、 年齢に応じた 社会資源を活 用した取り組 みの広がり ○福祉機関、 病院等との連 携	小学部	・地域生活につながる学習活動(基本的 生活習慣、余暇活動等)を充実させてい く必要がある。	・基本的生活習慣の確立や人との 関わりの広がりを目指した実 践を重ねている。	・懇談や支援会議等で児童の発達 の状況や将来像について共有し、 学校、家庭、関係 諸機関で一貫した指導を行う。			
		中学部	・地区老人クラブとの交流会や総合的な 学習(探究)の時間を通して、地域 の人、ものに関心を広げている。	・生徒が地域を知り、地域の方 とのふれあいを有意義に感じる 活動を計画推進している。	・地域とつながる学習の内容を検討し、 計画的に地域とつながる学習を進 めていく。			
		高等部	・卒業後に働き続けられるよう、自己理 解(自己有用感・障がい理解)の深まり が必要である。	・生徒と保護者、学校が、適切 な自己理解のもと、卒業後の働 く姿をイメージしながら進路に ついて考えている。	・適切な実態把握のもと、実習先 や地域を巻き込んだ学習を展開し ていくことで、より適切な自己理 解が図れるようにする。			
		訪問学級	・病院関係者(看護師、医療、リハビ リ、療育等)や保護者と連携を図りな がら、安心・安全な環境作りに向け、 実態把握に努めている。	・児童生徒一人一人が障がいや その程度、発達段階に応じて学 習に見通しや期待を持ったり、 病棟と学校生活への切り替えを 意識したりして生活する。	・病棟からの申し受けやリハビリ 懇談会等で得た情報を日々の学 習に取り入れ、支援 の改善や充実を図る。			
		総務部	地域の方々とかかわりの充実が課題で ある。	・白兔まつりやクリーンクリ ン活動等を通して、地域の方々 とのふれあいを深めている。	行事の案内や様子をホームページに 掲載する。行事後にアンケートを 実施し、問題点を改善していく。			
2 「何を 教える (学ぶ) のか」教 育内容の 整理	○学習集団の 育成	小学部	・障がいの重度重複化、多様化に伴い、 児童の実態に合った教育課程、教育 内容を検討していく必要がある。	・的確な実態把握を行い、教育 課程や教育内容について検討 し、改善が図られている。	・本年度の研究(教育内容等の整理) の推進とともに、学部の教育課 程検討委員会において検討する。			
		中学部	・昨年度の研究の成果と課題を踏まえ 授業改善に取り組んでいる。本年 度は、地域とつながる学習及び新 学習指導要領の趣旨を踏まえた 教育計画立案をしていきたい。	・新しい教育の流れを踏まえ、 生徒実態に即した教育内容の整 理を行い、学ぶ意欲の向上を目 指した授業づくりに取り組んで いる。	・校内研究と関連させた教育内容 の整理と教育計画の立案を進め ていく。 ・昨年度の研究を活かして学ぶ 意欲を高める授業づくりに努 める。			
	○主体的に学 ぶ態度の育 成	高等部	・生徒の実態の変化に合わせた教育 内容の整理が必要である。 ・卒業後の自立した生活に必要な 基本的生活習慣が定着していない。	・新学習指導要領、「付きたい 力」を元に、学習内容が整理さ れている。 ・生徒と保護者、学校が、自立 に向けて必要な力を共通理解 し、その定着に努めている。	・校内研究と連動し、各教科ごと に教育内容を整理する。 ・生徒、保護者一人一人の存在 が認められる安心感を基盤とし ながら、普段の肯定的な関わり、 連絡帳や電話等における関係 づくりを進めていく中で、生徒、 保護者との信頼関係を構築する。			
		訪問学級	・教職員間で一人一人の実態や課題 を共有しながら学習を進めてい る。さらに、新学習指導要領を 基に研修を深め、目標や指導内 容について整理する必要がある。 ・ICT教育機器(視線入力スイッチ、 iPad、個に合ったアプリ等)を 日々の学習の中で活用している。	・新学習指導要領を基に研修を 深め、教科、各教科等合わせた 指導の目標、指導内容の整理が できている。	・目標の妥当性や指導内容につ いて教職員間で話し合いの場を もつ。 ・実態に応じた適切な環境を学 部内で協力しながら整備し、 アイデアを出し合い、日々改善 に努める。			
	○内容の整理	教務部	・個別の教育支援計画や個別の指導 計画の様式が新学習指導要領や 白兔の付いた力に対応していない。	・個別の教育支援計画や個別の 指導計画の様式を、研究で行わ れる年間指導計画の整理と同じ 方向性で見直すことができている。	・個別の教育支援計画や個別の 指導計画の様式、それを作成す るための保護者アンケートや 記入例の見直しを行う。			
		研究部	・各教科・領域における具体的な 指導内容の設定及び配列、「教科 別の指導」と「各教科等を含む 指導」との関連、単元間のつな がり等についての検討・整理が 必要である。 ・学習評価の在り方について検討 し、「評価」-「改善」につなげる 仕組みを整備する必要がある。	・新学習指導要領および、白兔 の付いた力に合わせた教育内容 や指導計画の整理が行われて いる。 ・児童生徒の学習状況の把握に 活用できる仕組みの整理が行 われている。	・全職員体制でグループ研究・ 学部研究を行い、教育内容等の 整理を行う。 ・県内・県外校の視察や情報交 換等を行う等、情報を収集を図 り、学習状況を把握できる仕 組みの整理を行う。			

○教材の工夫	キャリア教育部	<ul style="list-style-type: none"> 「児童生徒に付けたい力」が本校の障がいへの重度・重複化に対応した計画や学習内容になっているか検討することが課題である。卒業後の生活を見据えた、一貫性のあるキャリア発達を大切にした教育を推進する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 「付けたい力」が本校の実態に対応していることが分かり、実態に応じた目標を意識して指導している。 各学年の産業現場等における実習の意義を理解し、生徒や保護者に説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 現場実習ふりかえりの会での学校に対する意見を集約する。障がい福祉サービス事業所、卒業生・保護者への聞き取りを行う。 産業現場等における実習について中学部から高等部6年間の移行が分かるように整理する。進路に関わる学習の見直しをする。 				
	情報教育部	<ul style="list-style-type: none"> 情報機器の操作、活用マニュアル等の整備が十分でなく、アプリ等の活用も不十分である 情報モラルの教職員の意識にばらつきがある。 図書館資料の積極的な活用が不十分である。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報機器の活用や、アプリの活用方法について理解している教職員が増えている 基本的な情報モラルについての知識を習得している。 図書館資料を活用した授業がどの学部でも行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報機器のマニュアルを整備、ICTサポート事業との連携等で研修の機会を設ける。 情報モラルに対する研修会を実施する。 バリアフリー資料や図書館資料を活用した授業実践例の紹介を行う。 				
3 様々な危険から安全を確保する防災・安全教育の充実	○防災、災害に対する対応策の整備	健康安全部	<ul style="list-style-type: none"> 災害時における対応の整備が進んできた。避難訓練、児童生徒の引き渡し訓練の実施方法を再検討していくことでより一層の安全教育に努めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な災害から自分を守る方法を学ぼうとする児童生徒の育成を図りながら教職員の意識が向上している。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練、児童生徒引き渡し訓練の内容を再検討しより充実した訓練にする。 学校安全計画に従って着実な仕事を行う。 			
	○児童生徒の防災意識を高める活動の推進	学部	<ul style="list-style-type: none"> 食物アレルギーや障がいや疾病に配慮の必要な児童生徒について健康、安全面に関わる危機管理についての教員一人一人の意識の高揚と体制を整備する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の疾患や行動の把握、アレルギーや感染症の対応について共通理解し、学部全体で危機管理の意識が高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 学部会等で日々のヒヤリハットに関する情報を共有し、要因を検証し適切に対応する。 			
4 チームで取り組む教育相談・支援の充実	○スムーズな情報共有と関連機関との連携	小学部	<ul style="list-style-type: none"> 児童の気になる行動に対して、児童を取り巻く状況や家庭や関係諸機関と連携しながら解決していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 関係者間でスムーズな情報共有を行い、気になる事例や問題に対して早期に対応している。 	<ul style="list-style-type: none"> 学部全体で児童について情報を共有するとともに、関係者同士（担任、学年、支援部、SSW、管理職、外部の関係機関等）とつながりを持ち、様々な視点を持って問題解決に努める。 			
		中学部	<ul style="list-style-type: none"> 様々な教育課題や相談に対して、関係職員や関係機関につなげる教育相談の充実に向けてきているが、保護者アンケートの結果からは十分に保護者のニーズに沿っているとは言えない結果となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> チーム学部・学年の意識を持ち、支援の検討、生徒指導や保護者対応、教育相談等にあたり、生徒や保護者の信頼を得ている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の課題状況に応じたケース会議や相談に努める。 情報共有を大切にされた職員の貫いた生徒指導、進路指導を進めていく。 保護者のニーズを踏まえて、支援部や関係機関とつながる相談支援活動を積極的に進めていく。 			
		高等部	<ul style="list-style-type: none"> 学部・学年でより一貫した指導・支援をしていくためのシステム構築されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 報告・連絡・相談のシステムが明確化され、学年・学部としての指導・支援が行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> 職員朝会、学部会、学年会等で、生徒の実態や現状を報告、連絡、相談し合うシステムを構築することで、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたれるようにする。 			
		支援部	<ul style="list-style-type: none"> 教育相談体制を整えることで、ケース会議等、チームで取り組む機会が増えてきているが、その取り組みを共有して次に生かす・全体に広げるに至っていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活や学習の中での教師の気づきや児童生徒の困り感をもとに、適宜ケース会議を開いたり、外部専門家や関係機関につないだりすることで、児童生徒への支援がより充実している。 	<ul style="list-style-type: none"> 早期発見、早期支援・対応に向けた体制づくりと活用に取り組む。（ケース会議、生徒指導との連携、関係機関との連携） 事例を紹介し合うことで、活用に生かす。 			
		総務部	<ul style="list-style-type: none"> 生活の手引き、生活のアンケート等の活用、家庭や関係機関等との連携の充実が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 支援部や関係機関、家庭と連携し、児童生徒の支援を進めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒情報を学部や支援部等に伝え共有していく。チェックシート、生活の手引きの内容を検討する。 			
5 地域におけるセンター的機能の充実	○ニーズに応じた専門性の発揮	支援部	<ul style="list-style-type: none"> センター的機能として、担当の職員を中心に取り組んできているが、学校全体としてどう取り組んでいくのかを、整理してさらなる充実を図る必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> センター的機能の充実に向けて、教育相談や情報発信に生かせるように全教職員ひとりひとりの専門性を高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 専門性を高めるための研修及び15分研修の充実を図る。（専門性振り返りシートの活用、研修内容の工夫） 			
		全学部・分掌	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの学部や分掌ではニーズに応じてセンター的機能にかかわることができ素地はあるが、学校体制としては整備が不十分である。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校にある相談等について、必要に応じそれぞれの学部や分掌の強みを生かした支援や助言をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 学部、分掌でセンター的機能にかかわることができる内容を整理する。 			
6 業務改善の取組	○会議、研修等の見直し ○業務の目的の再確認	全体	<ul style="list-style-type: none"> 一昨年度と比較し時間外労働時間を削減することはできたが、職員によっては時間外労働が常態化しており改善が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 会議、研修等必要に応じて効率的に運営されている。 教職員が時間にゆとりをもった業務が行われている。 時間外勤務時間が削減されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 会議等の優先順位を洗い出す。 行事の準備等に過剰なものがないかの点検する。 業務過剰になっていないか管理職員が配慮する。 			